

# 安川電機 歴史物語

## 第一章 創業の精神

当社創業当時の経営者、技術者など全員の心意気は当社の「社憲」に端的に現れており、その精神は今も脈々と受け継がれ今日にいたっている。

### 「社憲」

当社は、安川敬一郎が、「産業を興して国の恩に報ゆる」の志に基づいて、大正4年(1915年)設立したものである。

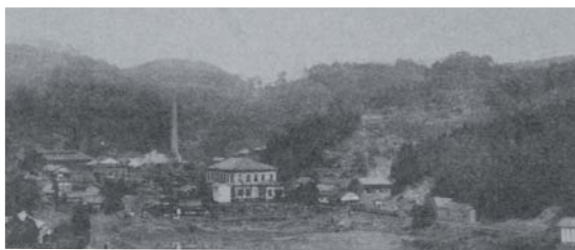
#### ―― 経営理念 ――

当社の使命は、その事業の遂行を通じて広く社会の発展、人類の福祉に貢献することにある。当社はこの使命達成のために、つぎの3項目を掲げ、その実現に努力する。

- 1 品質重視の考えに立ち、常に世界に誇る技術を開発、向上させること。
- 2 経営効率の向上に努め、企業の存続と発展に必要な利益を確保すること。
- 3 市場志向の精神に従い、そのニーズに応えるとともに需要家への奉仕に徹すること。

安川敬一郎は、黒田藩士徳永家の四男として、嘉永2年(1849年)福岡で生まれ、幼名を藤四郎といった。藤四郎は安川家の養子となり、17歳のとき名を敬一郎と改め家督を相続した。

明治維新後、国内留学などで欧米の新知識と思想を学んだ敬一郎は、明治7年、兄幾島徳(めくむ)の突然の戦死を受けて炭坑業に専念することになる。石炭の直接販売に力を注ぐ傍ら、採炭の面でも新しい技術を取り入れながら、年とともに鉱区を広げてゆき、明治29年



明治35年新築の明治炭坑社屋と明治第一坑

に明治炭坑株式会社を設立した。

敬一郎の事業展開は、炭坑業のみにとどまらない。石炭の消費の拡大が見込める紡績業に着目し、明治41年、明治紡績合資会社を設立した。また、日中合併事業として製鋼所の建設にも携わり、大正6年に九州製鋼株式会社を設立した。この九州製鋼株式会社は後に日本製鐵株式会社と合併された。この他にも敬一郎は、鉄道、銀行経営にも事業を広げている。

また、敬一郎は人材育成にも力を注ぎ、技術者養成の専門学校として明治専門学校を明治42年に開校した。その後、明治専門学校は官立に移行し、現在は九州工業大学として多くの技術者を輩出している。



明治専門学校本館

### 起業

大正4年(1915年)、株式会社安川電機の前身である合資会社安川電機製作所が設立され、安川敬一郎の五男である安川第五郎が代表社員、つまり社長となった。

第五郎は東京帝国大学電気工学科を卒業後、久原鉱業所日立製作所(後の株式会社日立製作所)へ入社し、1年間勤めた後、アメリカのウエスチングハウス社でさらに1年間の実習生活を送り、帰国後

電機製造事業を興したものである。

当初は、明治鉱業会社の各炭坑用電気品の受注製造からスタートした。当時の製品目録によれば、発電機、電動機、変圧器から抵抗器、開閉器、ヒューズなどの小物まで注文があれば、なんでも設計、製造するといった方針であった。

当時、電動機は産業革命以来の蒸気機関に代わる新たな動力としてあらゆる産業分野へ進出をし始めていた。しかしそのほとんどは外国からの輸入品であり、国産のものは極めて少なかった。電気機器製造技術は欧米の技術に比べて数段の遅れがあり、これに取り組むということは、時代の最先端を行くということであった。

### 製品の変遷

電機品であれば何でもという積極的な営業姿勢で取り組んだ結果、筑豊地方の炭鉱各社からのポンプ用、巻上げ機用の電動機から、電力設備として変圧器、配電盤、電圧調整器など、九州水力電気株式会社からの柱上用変圧器、明治鉱業へのスチームエンジンドライブ交流発電機、八幡製鐵所への起重機用直流電動機、日本水電株式会社への水車発電機、名古屋市電への電車用直流電動機など、時とともに製品の種類も大きく広がっていった。また、南満州鉄道株式会社からは撫順～奉天間の44kV用送電設備(1000kVA変圧器4台

当社創立90周年を記念し、「安川電機歴史物語」の連載を開始しました。

含む)一式を受注している。

良心的な経営姿勢と技術者のサポートによって、次第に信用を高めて仕事量は増えていったが、特殊ものの一品生産ということから利益のほうは一向に上がらず、創業から昭和6年までの17年間は赤字経営が続いた。

この間、第一次世界大戦後の経済恐慌や関東大震災の影響による深刻な不況の中、製造品目制定委員会が設けられ、赤字製品の整理へ取り組むことになった。品目整理は、二つの目的を持っていた。一つは原価低減のための生産性向上、もうひとつは専門とする製品の技術を深め、特色ある製品を世に送り出すためであった。品目整理は、製品への愛着や得意とする分野が技術者それぞれによって違うなど、簡単には進まなかった。利益の出ない発電機、遮断器、避雷器、変圧器の製造を中止する一方で、部品、製品の標準化を図り、それまでの受注生産から順次仕込み生産に移行していった。こうして製造品目は電動機と制御器に絞られていった。

また営業活動の面では、第一線の技術者がカスタマを直接訪問し、機械の種類、据え付け場所、稼働状態を調べ、技術指導などの面で細かな相談に乗った。この姿勢は当社の技術の奥深さへの信頼と、営業の良心的な心配りへの信頼という二つの効果を上げ、販売実績を着実に伸ばし、昭和7年に創業以来初めての利益を出してからは、急速な業績の拡大をみたのであった。この背景には、スーパーシンクロナスモータやボールベアリング付き電動機の成功があった。

文責：人事総務部・広報グループ 村田 晋

棟方志功

# 安川カレンダー 物語

第九話

## 安川カレンダーの誕生

昭和30年、安川電機のPR誌「安川ニュース」が創刊された。棟方画伯には度々挿絵や執筆をお願いしていたが、昭和33年新年号の付録として、画伯の作品を用いたカレンダーを作ろう、という企画が上がった。歌人吉井勇の短歌集を板画化した「流離抄」の中から選んだ作品を、A4サイズの木炭紙に白黒で印刷。このカレンダーが非常に好評だったことから、翌々年から本格的な「安川カレンダー」が誕生することになった。

昭和35年のカレンダーを制作するためにその前年から準備が進められたが、ちょうどこの年、画伯はロックフェラー財団とジャパソサエティの招きで、約10ヶ月にわたり渡米していた。「今度は一番良いものばかりを準備してくださいね」という大木(澄朗、当時の安川電機東京商品課長)のお願いに、「よし、それでは今迄の傑作ばかりを集めてみよう」と、画伯は滞米中に制作した作品から選りすぐり、ニューヨークから郵送した。

この「滞米作品集」の時に、板画を和紙に印刷するという方法が初めて試された。印刷を担当する大日本印刷は、板画の色合いを再現するために10色近いインクを用いたり、和紙の繊維が剥けないようインクを柔らかく調整、和紙が印刷機に巻き込まれないよう通常よりゆっくりとしたスピードで印刷するなど、新しい技術を導入する必要があった。こうした多くの関係者の熱意と努力により、安川カレンダー「滞米作品集」は完成した。

実はこのとき使用した和紙が、画伯が作品用に使用していたものと同じ最高級の出雲和紙だったこともあって、カレンダーを剥がして「本物」だと称し販売する輩が現れた。このため、翌年は越前和紙に変更し、さらに和紙の裏面に題字を印刷して、本物の板画が印刷物かかすぐ見分けられるような工夫を行った。完成度が高いために起きたこの一件で、安川カレンダーの評判はさらに高まった。



安川ニュース付録「流離抄」

安川モーター

■安川カレンダーご紹介サイトは…  
<http://www.yaskawa.co.jp/company/munakata>